

多言語・多文化研究の担い手たちによる村上春樹

柴田勝二・加藤雄二編

『世界文学としての村上春樹』

東京外国語大学出版社 二〇一五年二月

はじめに

世界は今、我々の想像を超えるスピードでグローバル化という天網に絡め取られ、日々変容を続けることを余儀なくされている。本書は、そんなグローバル化が進む現代社会において、〈世界文学〉と称されるまでになった〈国際作家〉村上春樹・Haruki Murakamiを、主専攻語だけで二十七言語を有し、日本における多言語・多文化教育の中枢を担う本学の研究者達が、母国内外の〈現場〉からの〈検証〉を試みた成果である。

村上文学が纏う普遍性や日本という地域性、何より現在四十を超える言語に翻訳され、様々な地域で愛読される国際性をも孕む特質について、従来の論考とは異なる視座からのアプローチにより、世界各地の翻訳・研究の現場における情報、及び論考を収載した一冊でもある。本書には、多言語・多分野に渡る国内外の様々な研究者たちの、〈今〉の〈現場〉からの論考が収載されている。本稿では、それぞれの論考について字数が許す限り詳細な情報を紹介することで、『世界文学としての村上春樹』の香りを感じて頂ければ幸いである。

東京外国語大学で Haruki Murakami を検証する意義

東京外国語大学から、〈国際作家〉としての村上春樹・Haruki Murakami を検証する意義については、本書編者の柴田勝二氏、加藤雄二氏が、「まえがき」と「あとがき」において、それぞれの研究分野に即した視点から簡潔に述べている。

まず、「まえがき」で、日本近代文学を専門としつつも村上春樹について多くの精密な論考を執筆されている柴田勝二氏が、「村上春樹を現代日本の代表的な〈国際作家〉として取り上げるのは、もちろん新しい試みではない。」と前置きした上で、本学が有する二十七言語の教育と世界各国の言語や文化を研究する人間が集う環境こそが、このような探求をおこなうのにふさわしい条件を満たしている、と編纂の動機について述べている。

柴田氏は更に、この点が現代日本文学という母国の文化を外部からの眼差しを活用しつつ捉えるためにも強力な条件として働くはずであり、外国文学を専門とする教員のなかにも村上春樹に一家言持つ者が多くいる点や、国内外の研究者ネットワークにより海外における村上研究者の情報も入手できる点を挙げ、これらの諸条件を総合的に勘案することで、この〈国際作家〉を改めて多角的に捉えることが可能ではないか、という起点的動機についても言及している。

次に、「あとがき」では、アメリカ文学の専門家であり、村上文学の精読者としても周知される加藤雄二氏が、本書刊行の目的と意義について明示している。加藤氏は、村上作品が主と

して日本を舞台にしているにもかかわらず、グローバル化へと向かう現代社会の状況に驚くべき柔軟さで適応し、絶えず新しい状況をつくり出してきたことが、現在の村上研究がグローバルに展開されていることや、それに伴う文学的状況の変化がもたらされていることの理由の一つであると述べている。また、村上春樹・Haruki Murakamiは「文学」というものがすでに抗いがたく新しい場へと変貌してしまっている現状を、他の何よりも先駆けて教えてくれているのだ、とこれまで村上研究が辿ったあまりにも長い現在までの時間的経過についても言及している。

その上で、本書刊行が、国内外の多くの論考を収載することで、単なる村上研究のグローバルなコミュニケーションを十全なものにすることだけを目指したのではなく、多言語・多文化を担う東京外国語大学を起点とした様々なアプローチと文学的言説を、よりポリフォニックに交錯させる試みとしての意義を持つとしている。最後に加藤氏は、「異なったコンテクストからの議論を並列することによって、より深い対話を生成する」ということを、本書刊行の目的の一つとして掲げている。

第一部 村上春樹と世界

本書は、大きく四部で構成されている。第一部には、国内外の著名な研究者七名の論考が収載されている。

まず、本書編纂者の一人である柴田勝二氏は、現在の村上春樹作品が世界各地の読者の心を捉え、多くの研究や論考が様々

に試みられている理由について、欧米だけでなくアジアの翻訳者や研究者たちの見方を挙げ、村上春樹が大きな影響を受けたとされる、海外の著名な文学者や文学作品との関係を丁寧に解説・分析し、村上作品全体を概括する論を展開している。

次に収められているのは、米国人研究者マシュー・ストレッカー氏の論考である。ストレッカー氏は、村上作品の欧米研究者の代表的な観点の持ち主である。一見すると日常的である多くの村上作品には、ユング的な集合意識などと照応する形で神話世界へと読者を誘いつつ、その世界を相対化する異界への回路が内在すると主張する。そんな村上作品世界が孕む多様性と普遍性について述べる論考である。

コリーヌ・アトラン氏は、フランスの代表的な日本文学の翻訳家である。アトラン氏は、村上作品の翻訳者として、村上作品がフランス語に翻訳しやすい反面、そこに描かれているはずの「日本」が、ともするとすっかり埋もれて見えなくなってしまう傾向があるとも述べている。翻訳家として実際の翻訳作業で直面する様々な問題を挙げながら、村上作品がフランス語という外国語へ変換されてもお失うことのない、普遍性や特殊性について言及している。

本書のもう一人の編者である加藤雄二氏は、自身の専門分野でもあり、村上春樹も崇拜してやまないアメリカのモダニズム作家、スコット・フィッツジェラルドを始めとした北米作家たちのみならず、大江健三郎などの日本文学者が描く作品の文脈との関係性と古典的特質についても詳細に分析したうえで、英米のポストモダン文学の書き手たちへ、新しい選択肢としての村上作品の特質の重要性を説いている。

台湾の研究者である蕭幸君氏は、日本におけるもう一人の〈国際作家〉カズオ・イシグロや、現代台湾文学の中核を担うひとりである頼香吟の作品と村上作品との対比考察を行っている。この考察を通じて村上作品を生身の村上といったん切り離し、カズオ・イシグロや頼香吟の作品と照応することで、「言葉」という目には見えない自己再生を促す力が、日本と台湾を内包するアジアという枠の中に通底する、人間の意識の同質性と異質性について鮮やかに論じている。

一方、つい先ごろまで本学でスペイン文学の教鞭を執っておられた柳原孝敦氏は、大塚英志氏の〈キャラクター小説〉論を踏まえた視座より論じている。現代の普遍的キャラクターを持つ村上作品と、自身の専門であるスペイン語圏作品との共通点を提示し、作品における〈キャラクター小説〉化の進行を指摘する。またそれが同時代のスペイン語圏の作家たちと共通する動向として、すでに四十年以上前にはみられたかもしれない可能性を示し、双方に共通する〈漫画的なキャラクター〉の普遍的特徴が、作品の中で「現実」と「異界」を結ぶ戦略的構造として果たす大きな役割を指摘している。

七名の論者の最後には、韓国における村上春樹文学の新進気鋭の研究者である趙柱喜氏が論考を寄せている。趙氏は、日本と韓国の大衆文化としてのサブカルチャーの重複部分に言及し、「ライトノベル」としての村上春樹論を展開している。柴田勝二氏が「まえがき」にて指摘しているように、この論考には前述の柳原氏の「キャラクター小説」という視座からの論考とも通底するものがある。趙氏は、村上作品をエンターテインメント性が高く、サブカルチャー的であるとしながらも、従来

のサブカルチャーとは決定的に一線を画す独自性を提示することで、時代に先駆け反映しつつも、その作品の時代性を読者に強制することのない構成こそが、広く世界で受容される原動力であると述べている。

第II部 世界の中で村上春樹を読む

第II部は、加藤雄二氏の司会のもとに、柴田勝二氏、柳原孝敦氏と、アメリカ現代文学の研究者で、翻訳や移動を視点とした先鋭的な村上論者とも評される都甲幸治氏、並びに、本学にて現代中国文学、特に満州における植民地文学を専門とされている橋本雄一氏による座談会が、この紙上で再現されている。五名の研究者が、本学ならではの多言語・多文化の象徴とも言える多角的視座から、村上春樹文学を巡る熱い討論会を展開する。

この座談会は、出席者の専門地域における文学作品や文化と村上作品との関係性や対比・考察が、様々な国や地域を取り込みながら紹介され、文字通り〈世界文学〉としての村上論を堪能できる。言及される国や地域の広さという意味においても異色の座談会であり、まさに東京外国語大学の香気を帯びた座談会である。例えば都甲氏は、豪州の研究者が指摘している「パラモダン」という概念を紹介しつつ、ポストモダンだけでなくポストコロニアルの文脈もあわせることで初めて見えてくる村上春樹の位置について、現代の中南米作家たちの位置と共通するという興味深い指摘を我々に示している。

また、現在、先行するアメリカを中心とした欧米の文学作品との関わりのみならず、韓国や中国などのアジア地域における歴史認識と村上作品との関連についても、研究の現状と共に語り合われている。加藤氏は、韓国における村上批判についての趙氏の指摘を紹介し、橋本氏が、現代中国語圏での〈新しいもの〉として村上春樹の文学を歓迎する若者層の読者や、歴史認識に対する村上の態度を歓迎する反響について紹介するなど、先行研究地域についての言及だけに終わらない点こそが、この座談会の多文化性を端的に表している。

それぞれの専門領域を有する五人の研究者たちが繰り広げる、多文化的視点での〈国際作家〉村上春樹・Haruki Murakamiを読み解く座談会は、その視線が世界中の様々な国や地域へと更に広がってゆく。〈世界文学〉としての村上文学が有する特質性や、作品全体を通底する普遍的共通性というべきものと、村上作品が受容されている国や地域固有の日本とは異なる文化との関係性という観点からも、「五人五様の研究者たち」が、それぞれの専門地域や専門分野の詳細な事例を対照にしながら、独自の視座で多彩な討論を展開している。

第III部 外国語のなかの村上春樹

第III部では、海外の様々な地域における村上文学の翻訳状況や受容の現状について、中国語、韓国語、英語、フランス語、ポルトガル語、の七言語九地域の〈現場〉からの情報を収載している。

中国語圏からは、橋本雄一氏と馮英華氏の共著により、少しシニールでユーモア溢れる登場人物たちが、ウィットに富んだ会話を繰り広げる対話形式の村上論が、楽しい謎かけと共に展開されている。

韓国語圏からは、崔在喆氏によって、三種類の異なる韓国語翻訳の差異についての論考が収められている。また、韓国における村上作品の初期の翻訳事情や、現在の翻訳・研究の状況、春樹文学の受容と評価についても、多岐にわたる報告が記されている。

高橋留美氏は、アメリカにおける村上作品の英訳本の変遷と批評を交えつつ、英語に翻訳・編集されることで生じるであろう「村上春樹」と「Haruki Murakami」との差異について、その構築過程を端的に論じている。

第一部にも論考があるコリーヌ・アトラン氏は、日本語の持つ曖昧さを抑えた明晰な文章を書く村上の表現を、フランス語に翻訳する際の根本的な問題、つまり、高橋氏の論とも共通する、一つの文化的要素を別の文化的要素へ変換する際の問題について詳細に語っている。

ロシア語圏からは、笹山啓氏によってロシアにおける村上作品の翻訳状況と売り上げ状況についての報告が記されている。それと共に、ロシアにおける村上文学の読まれ方の背景に潜む、現代ロシアの文化的状況の変化についても明快に述べられている。

メキシコの現状については、久野量一氏によってスペイン語圏全般における発売順序が、原書の発表順に縛られることのない現状と共に、主要読書層が若者であることや、翻訳される

際の独特な書名の採用状況について、ラテンアメリカ文化圏の〈今〉を伝えている。

最後に、村上作品がまだ読まれ始めたばかりのポルトガル語圏ブラジルからは、クニャ・ファウステイヒ・ユーリ氏と武田千香氏の共著で、二〇〇八年に集中的に翻訳本が出版された背景が報告されている。また、同じポルトガル語圏のポルトガルでは、ブラジルで翻訳されたものとは別に独自のポルトガル語翻訳の作品が、ブラジルで出版されている倍以上の作品数で既に市場に出回っている現状にも言及している。

第Ⅳ部 村上研究へのまなざし

第Ⅳ部では、柴田勝二氏が中心となり、日本国内外の村上春樹に関する論考を可能な限り収集し、報告している。日本国内の論考については、編者でもある柴田勝二氏本人が、英語圏については、もう一人の編者である加藤雄二氏が担当している。中国語圏の論考は、台湾・淡江大学助理教授の内田康氏と、柴田研究室院生の高艶氏、陸嬋氏、麻春祿氏が、更に、韓国語圏の論考も同じく柴田研究室の南徽貞氏が、それぞれ真摯な調査による資料を提供し、柴田氏によって丁寧な整理された論考として纏められている。

本論考の総括として柴田氏は、これからの村上春樹の論じ手について、今後は異文化を内包した論者が、日本人の従来の論じ手の意表を突く角度から村上文学に切り込んでゆくことを望む、と結んでいる。

本書の最後尾には、村上春樹の翻訳状況一覧が様々な言語の翻訳本の表紙写真と共に納められている。また、村上春樹年譜として、生活年譜や著作年譜と並べた翻訳書年譜も記載されたものが収められている。

おわりに

最後に、筆者のささやかな希求を一つ申し添えさせて頂くならば、柴田氏が「はじめに」で言及されていたように、今回収載出来なかったドイツやイタリアを始めとし更に多くの地域における村上論を紹介する、より東京外国語大学らしい『世界文学としての村上春樹 第二版』の刊行を、心より願っていることをここに記して本稿のペンを置く。

(平原真紀)